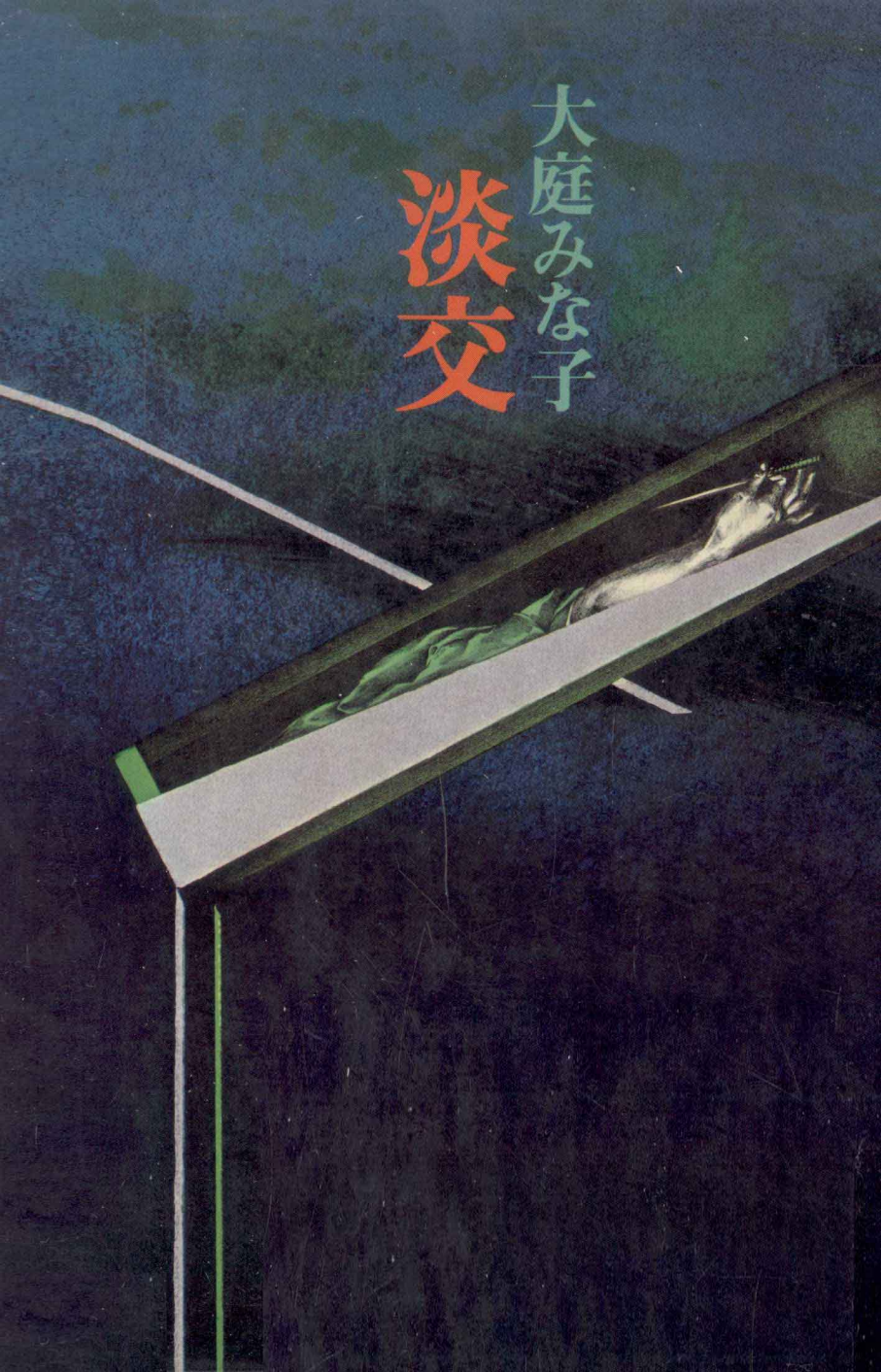
大庭みな子

淡交



淡交

大庭みな子

淡交　©1979

昭和五十四年六月二十二日　初版発行
昭和五十四年八月二十五日　再版発行

著　者　大庭みな子

発行者　清水　勝

発行所　株式会社　河出書房新社
東京都新宿区住吉町九五
振替口座（東京）〇―一〇八〇二　TEL三五五―五三一一

印　刷　亨有堂印刷株式会社
製　本　中西製本印刷株式会社

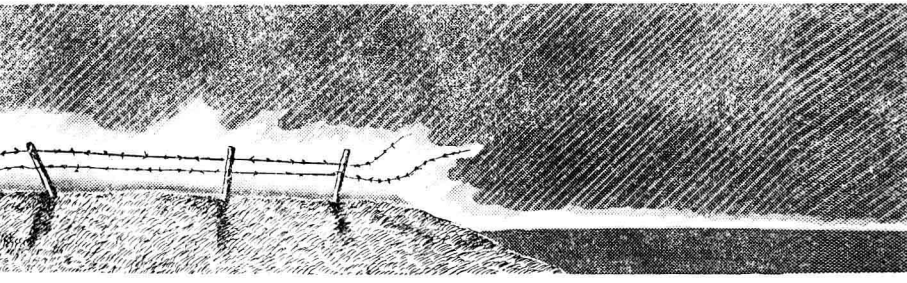
落丁・乱丁本はお取替えいたします

目次

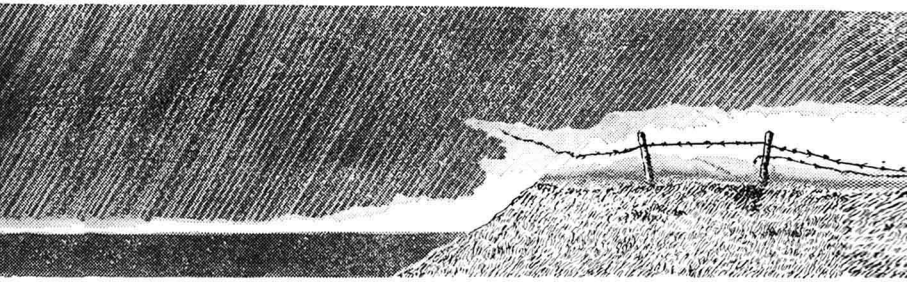
此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

山姥の微笑　7
火の女　35
淡交　69
タロット　97
柳の下　127
インコ　153
いさかい　181

装画・装幀　東谷武美



淡交



山姥の微笑

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

山姥の話をしよう。

昔語りの山姥は、山の中の一軒家で、白髪のざんばら髪を縄で結い、里から迷いこむ者をとって食おうと待ちかまえている。それと知らずに山姥の棲家(すみか)に迷いこんで一夜の宿を乞うた若い男が、まばらに歯のぬけ落ちた櫛をくわえてにっと笑う宿の主の奇怪な形相におびえると、ゆらぐ灯にその歯を黄色く光らせてこう言う。「お前さんは、今こう思ったね、〈薄気味の悪い、まるで老いさらばえた化け猫みたいな女だな〉と」

男はぎくりとして、更に思う。〈まさか、夜半におれをとって食うつもりではあるまいな〉

すると山姥はすかさず、彼女を上眼遣いに盗み見ながら粟粥をかきこんでいる男にこう言う。「お前さんは今、心の中で、〈まさか、夜半におれをとって食うつもりではあるまいな〉と思ったね」

男は蒼ざめ、「わたしはただ、この暖かな粥でやっと人心地ついて、急に疲れがでたなと思っていただけですよ」と言うが、心の中では〈さっきから、あんな大きな鍋に湯を煮立てているのは、やっぱりこのおれを、夜半に煮て食うための準備に違いない〉とからだを氷のように硬ばらせて思うのである。

山姥はにやりと笑い、「お前さんは今心の中で、〈さっきから、あんな大きな鍋に湯を煮立てているのは、やっぱりこのおれを、夜半に煮て食うための準備に違いない〉と思っただろう」と言うのである。

男はますます怯え、「何を、あなたはへんな言いがかりを。——わたしはただ、一日歩いてすっかりくたびれたので、この暖かな粥であたたまったからだが冷えないうちに、横にならせていただき、あすは朝早く出立したいものだと考えていたのです」と言う。

だが、心の中では〈全く気味の悪い女だ。やっぱりこの化け猫のような女は、あの噂にきく山姥に違いない。他人の心の中の言葉をこんなにはっきり読むんだからな〉と思う。

すかさず山姥は「お前さんは今こう思ったのさ。〈全く気味の悪い女だ。やっぱりこの化け猫のような女は、あの噂にきく山姥に違いない。他人の心の中の言葉をこんなにはっきり読むんだからな〉」

男はもう歯の根が合わないほどだったが、がくがくした膝頭で辛うじてからだをいざらせながらこう答える。「では、ひとまずお先に失礼して——」

そして這うようにして次の間にひっこみ、旅装をとかずに筵の上にからだを横たえると、山姥は男を流し眼に追って、「お前さんは今、すきを見て逃げ出せるとでも思っているのさ」と言うのである。

全く、男は山姥の言う通り、すきを見て逃げ出せるように、山姥を油断させようとして横になったのだった。

ともかく、山姥というのは次から次に相手の心の中を読み、遂に相手は命からがら山姥の棲家から逃げ出す。山姥はどこまでもそのあとを追ってきて、男はただ一目散に逃げるというのが、昔から語り伝えられた山姥の物語である。

しかし、山姥といえど、生まれたときから皺くちゃの婆さんであったわけではなく、つきたての餅のような肌の、甘酸っぱい匂いのする赤児であったことも、ねり絹のように輝く肌をぬめらせて男を誘う乙女の時代もあったであろう。桜貝のように光る爪を男の肩の肉に喰いこませて、むっちりとした乳房の間で恋人を窒息させたこともあっただろう。

だが、どういうわけか、うら若い山姥の物語は伝わっていない。どうやらうら若い山姥

は山に籠っていることはできず、いろんな動物に、たとえば鶴とか狐とか鷺などに宿って、美しい女房になり、人里に棲むといった話につくり変えられるらしい。そして、そういう動物の化身の女は、みんな頭がよくて、情にこまやかなのに、なぜか末路は哀れで、さんざん男に尽くしたあげく、物語の終末では無残に毛の脱け落ちた痩せ細った動物のからだに戻り、山に逃げ帰ると相場がきまっている。もしかしたらその哀れな動物たちが、恨みつらみをこめて山姥になるのではなかろうか。それにまあ、食うというのは極度の愛情の表現でもある。よく感極まった母親は赤ん坊をぎゅっと抱きしめて、

「食べちゃいたいくらい可愛いわ」と言うではないか。

さて、彼女は、正真正銘の山姥だった。

彼女は六十二歳で死んだ。

六十二歳の、魂が飛んで行ったあとの彼女の裸体は、アルコールで拭き清めると、つややかで若々しく、蠟でつくった女神の像のようであった。髪は半白で、なだらかな腹部の終りの丘には銀色の薄の幾筋かがなびいていたが、そのおだやかに閉じた瞼と、いくらかほころばせた口元のあたりには、不思議な、あどけなさと、泣き出しそうなのをこらえて笑っている少女のようなはにかみがあった。

彼女は全く山姥の中の山姥だったが、山の棲家を想いながら、ついぞ一度もそこに棲むこともなく、里の仮住いで人間の女としての一生を終えたのである。

彼女は物心ついたときに、すでに山姥だった。

まだときどきおしっこの失敗をする幼い頃、彼女は遊びに夢中になってついおもらしをしてしまったとき、とんできた母親に向ってこう言うのである。「マタ、チッパイ、チチャッタノ。マニアウヨウニ、イウンデチュヨ。モウ、キョウハ、カワリノパンツガナイノニ、ホントニコマッタコネ」

母親がつい笑い出すと、「アーアー、コノコニハ、カナワナイワ、ホントニイヤニナッチャウ」

夜、父親の帰りが遅くて、母親が時計を見上げると、「ホントニ、マイバン、マイバン、イッタイ、ナニチテルノカチラネエ。チゴトチゴトダッテ、ホントハ、ウチニカエッタテオモチロクナイカラ、ナルベクソトニイタインダワ、ミンナ、ダレダッテ、ソウチタイノハ、ヤマヤマナノニネエ、アーアー」

母親が苦笑して睨みつけると、「オバカサン、コドモハ、モウネナチャイ。イツマデモオキテルコハ、イツマデタッテモ、オオキクナラズニ、イツマデモコビトサンデイルシカ

アリマチェンヨ」

次から次に他人の心を読む子供に母親はあきれ果てて、「この子は頭がいいけれど、全くひとを疲れさせちゃうわね」と辟易した。

少し大きくなって、母親が新しい玩具を買い与えると、「サア、コレデ、シバラクハシズカデ、ホットスルワ」と言い、母親がいくらかむっとして彼女を見つめると、「ナンダッテ、コノコハ、ナニカラナニマデヒトノキヲ、ヨムノカシラ。ヤマウバミタイ。ヤマウバミタイニ、ヒトニキラワレルンジャナイカシラ」

もちろん、そういうことを、母親が常日頃述懐していたので、彼女は単に復誦しただけのことなのである。

やっと彼女が学校に行くようになると、母親は子供から離れた時間を持ってほっとしたが、いつの間にか娘が人の心を復誦する癖をやめ、だんだん無口になったことに気づいて、ある日こう訊ねた。「学校に行くようになったら、あんたは急におとなしくなっちゃったのね」

すると、娘はこう答えた。「思っていることをそのまま言うと、みんながいやな顔をするから、黙っていることにしたの。大人は子供がバカなフリをして、なんにも気づかない

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.